勝田竹翁筆『富士牧狩』考

――《曽我物語》研究序説

宮腰直人

一、問題の所在

『曾我物語』の代表的な場面の一つに富士の巻狩の場面がある。建久四年五月二十八日、源頼朝が主催した巻狩の機会に乗じて、曾我兄弟は工藤祐経を討つという積年の願いを遂げる。巻狩をめぐる一連の場面は、絵画メディアにも多く描かれ、曾我兄弟の敵討譚の視覚的享受において要所であったことがわかる。「月次風俗図屏風」（東京国立博物館蔵）や土佐光吉筆に比定される「曾我物語図屏風」（渡辺美術館蔵）など、十六世紀には、富士の巻狩は、曾我兄弟の物語を象徴する場面として定着していたと考えられる。

近世前期に活躍した絵師・勝田竹翁（一六〇〇?～八七以前没）が万治三年（一六六〇）に制作した『富士巻狩』は、右の富士の巻狩のイメージと『曾我物語』との関わりをさらに推し進めた絵巻として注目に値する。仮名本『曾我物語』では十二巻にも及ぶ曽我兄弟の物語を、本作は富士の巻狩から語り起し、敵討とその顛末を二巻の絵巻に仕立てあげる。曾我兄弟の物語を絵画化した貴重な作例ながら、稲葉二柄氏の紹介以降[1]、その後、ほとんど研究は進展していないのが現状である。

本稿では、『富士牧狩』研究の端緒として、諸伝本の概要を示し、冒頭場面の読解から、曾我兄弟の物語の変容の一端を明らかにすることを目的とする。挿絵に携わった竹翁は、狩野長信に師事し、寛永七年（一六三〇）に徳川家光の御部屋絵師に任じられ、後に家綱にも重用されるほどの絵師であった[2]。『徳川實紀』「厳有院殿御實紀」巻十九・万治三年（一六六〇）正月八日条には、「勝田隠岐丞絵百人一首一帖」という記述が認められ、『富士牧狩』を描いた時期に家綱の文化活動の一端を担っていた様子がうかがわれる。現在では忘却されたに等しい絵師だが、狩野探幽と同時期に活躍し、狩野派の画業の一翼を担った人物であることを確認しておきたい。

かつて、江戸城には、曽我兄弟の弟・時宗の十番切を壁に描いた十番切の間があったという（『徳川實紀』「台徳院殿御實紀」巻四十三・元和二年〈一六一六〉九月十五日条）。断片的ながら、

こうした言説を視野にいれると、『富士牧狩』の考察は、近世武家社会にとっての曽我兄弟の物語とは何かという興味深い問いに繋がってくるように思われる。

制作の担い手や成立年次が明確な『富士牧狩』を起点にすることで、近世の曾我兄弟をめぐる多様な言説の諸相を捉える手がかりを得たい。

なお、『富士牧狩』は、「曾我物語絵巻」の別称を持つ。本稿では、『曾我物語』十二巻を絵巻や絵入写本に仕立てた作品群と区別するため、便宜上、諸本に共通する内題「富士牧狩」を書名として採用し、論述を進めることをお断りしておく。

二、『富士牧狩』諸本点描

まずは、勝田竹翁筆『富士牧狩』の主要伝本と概要を紹介しておこう。稲葉氏の論考をふまえ、以降、管見に及んだ伝本を簡略に掲出する。影印や翻刻がある場合は《　》に情報を記載した。

①ボストン美術館蔵本　二巻　濃彩　万治三年（一六六〇）写
《『ボストン美術館日本美術調査図録』第二次調査》

②宮内庁書陵部蔵本　二巻　濃彩　嘉永七年（一八五四）写
《日本の古典17『義経記　曽我物語ほか』に挿絵一部掲載》

③東京国立博物館蔵本　二巻　淡彩　近世後期写
《稲葉二柄論文に翻刻》

④神宮文庫蔵本　二巻　詞書なし　淡彩
《日本の古典17『義経記　曽我物語ほか』に挿絵一部掲載》

⑤東京芸術大学美術館蔵本　三巻　白描

⑥実践女子大学山岸文庫本　写本二冊　詞書のみ
《国文学研究資料館マイクロ》

①は、ボストン美術館ビゲローコレクションに所蔵される。奥書には、「万治庚子秋日　勝田陽渓画之」とある。陽渓は竹翁の別号。奥書には、朱文方印「翠菴之印」も捺される。筆致からも勝田竹翁作と認められる[3]。本文、挿絵二十図とも、②から⑤の伝本に一致し、これらの伝本の原本であると考えられる。一部カラーの画像が同美術館のホームページで公開されている。挿絵の状態は良好だが、詞書には補修及び補筆が加えられているようである（後述）。本作は、稲葉氏の論考の時点では知られなかった伝本で、この絵巻の発見によって、『富士巻狩』は、勝田竹翁の初期の代表作として認定されたことになる。

②から④に関しては、いずれも稲葉氏の論考に解題が載る。②は、丹鶴叢書刊行に際して集められた絵巻の内の一点である。奥書から丹鶴叢書に尽力した山田常典が関与していたことが知られる[4]。近世後期の作だが、濃彩で描かれた優品である。ただし、錯簡があり、扱いに注意を要する。③と④は、それぞれ模本で、稲葉氏の解題によれば、前者は木挽町狩野家に伝来したとされる。詞書の部分に数か所空白があり、これは①の詞書に補修及び補筆箇所と一致する。③は原本ないし、①に基づいた伝本を模したことが知られる。後者は伝来未詳で、詞書はなく、挿絵のみを二巻仕立てにした伝本である。

⑤は、これまで注目されていない伝本で、原本では二巻仕立てであったのを三巻に分けて模写されている[5]。挿絵は白描で、場面各所に彩色の注記がある。この伝本で注目すべきは、詞書に書写

の際にもとの絵巻にあったとおぼしい欠損部分をそのまま空白にしている点であろう。稲葉氏の翻刻と対照すると、この空白部分は③とほぼ同じ箇所であることが確認でき、この伝本も①や③と同系統の絵巻を書写した模本であることが察せられる。

⑥は、挿絵なしの詞書のみの写本である。書写年次未詳。上下二冊はそのまま③の巻立と一致し、詞書の用字もほぼ同じである。本来挿絵がある箇所で、段落をあらためており、絵巻の詞書を意図的に書写したと判断される。この写本では、①の補訂部分、③と⑤の伝本にあった詞書欠損部分を同様に「紙すれ也。ふる本の侭」と注し、その箇所の本文を記していない。「ふる本」が一体どの伝本を指すかは未詳だが、「紙すれ也」という文言から、この写本の筆者は原本である①を実見していた可能性もあろうか。

以上、主要伝本を概観してきた。[6] ②や⑤に錯簡が認められるものの、内容としては本文、挿絵とも基本的には原本と目される①に忠実であり、書写の過程で大きな異同が生じていないことがわかる。

なお、右の伝本のうち、④は、詞書を欠き、挿絵のみの伝本である。こうした挿絵のみの伝本の発生を考える上で興味深いのは、松平定信が編纂した『古画類聚』（寛政七年〈一七九五〉）にこの絵巻の挿絵が部分的に採られている点である。[7] 松浦静山『甲子夜話』続編巻十六には、狩野養川院からの聞き書きとして、竹翁が「御側絵師」であったことを伝え、近世後期になっても竹翁の絵が珍重されていたことが知られる。[8] ②が丹鶴叢書の題材として収集されたこともあわせ、『富士牧狩』の受容が近世後期の知識の体系化の一端に関わっていたことに注意しておきたい。

次に、『富士牧狩』の梗概を示しておこう。便宜上、Aから K に区分した。

A　建久四年五月、源頼朝が富士の巻狩を開催する。この牧狩で頼家が初めて鹿を射止める。一同、矢口の祭によって狩りの成功を祝う。続いて新田四郎忠常が猪を仕留める。その後、今度は工藤景光が大鹿を射ることに失敗する。

B　ここに河津の三郎の子、曾我十郎祐成と五郎時宗が巻狩の機会に乗じて敵・工藤祐経を討つべく潜入する。祐成と時宗、敵討の決行を前に、母親や大磯の虎、箱根の別当へ手紙を書く。鬼王と道三郎に形見の品を託し、別れを告げる。

C　建久四年五月二十八日夜半、祐経と時宗は本多の次郎親経の案内で祐経の寝所に入り、敵討を果す。

D　宿願を遂げた祐成・時宗は名乗りを上げる。曾我兄弟は吉香小次良や愛甲三良季隆を切り捨てる。その後、久慈の弥太郎兄弟や岡部の弥三郎が駆けつける。高名を挙げようと意気込む久慈は、時宗に退けられ、常陸国へと逃げ、笑い者となる。

E　さらに海野小次郎らも曾我兄弟を討たんと駆けつける。祐成と時宗も応戦するが傷を追う。祐成は、遂に新田四郎忠常に討たれる。

F　残された時宗は、遊君に変装した大力の五郎丸に組み止められる。周囲の者の加勢もあり、時宗は捕らわれる。

G　捕らわれた時宗は頼朝の前に引き出され、審問を受ける。頼朝のまわりには、北条時政以下、畠山次郎重忠など数々の武士が配された。時宗は伊藤家の所領をめぐる諍いや祐経へ

の恨みや母親への思いを述べる。そこに傷を負った新田が祐成の首を持参すると、時宗はともより、近習の人びとも涙を流した。

H 鎮西中太が時宗の成敗を任され、一同移動しようとしたところ、祐経の子・犬房丸があらわれる。祐経の敵を討たんとする犬房丸だが警護の者にとどめられる。時宗は犬房丸に声をかけ、一同処刑場へとむかう。

I 頼朝と北条時政や畠山重忠、和田義盛ら、時宗の処遇で意見を交わす。時政と重忠の擁護に頼朝心を動かされ、時宗は死罪を免れる。

J 頼朝の決定は告げる使者が時宗のもとに到着し、陸奥国への配流になったことを伝える。警護の武士や見物の人びとも時宗の罪が減らされたことに喜ぶ。だが、時宗は祐成との兄弟の絆を語り、再三死刑を求めた。祐成を慕って死を望んだ時宗の振る舞いは、人びとの涙を誘った。

K 祐成、時宗はともに曽我二所権現として祀られた。その後、神職社僧によって五月二十八日を恵日と定められ、近国他国の人びと信仰を集めた。

上巻は、A富士の巻狩の場面を起点にして、D曾我兄弟による敵討遂行、名乗りをあげるまでを描く。下巻は、E新田四郎に祐成が討たれ、時宗も捕らわれて、死罪になり、K二人が祀られるまでを描く。兄弟が敵討を果す前提となる艱難辛苦へ言及がなく、その顛末が語られるため、結果として頼朝の審問や時宗の死刑に力点が置かれた構成になっている。これらAからKの展開は、いずれも先行するテキストを活用されていることが、すでに稲葉氏によって指摘されている。[9] 稲葉氏は、AやC、Dや Gが『吾妻鏡』に拠り、加えて、仮名本『曾我物語』や舞曲『夜討曾我』『十番切』の表現が活用されていることに言及する。

先行テキストとの関係を確認した上で注目されるのは、AやD Gにおいて線を引いた箇所に顕著にうかがわれる『吾妻鏡』の活用である。言うまでもなく仮名本『曾我物語』や舞曲と史書『吾妻鏡』とは、言説の質が異なる。それがなぜ曾我兄弟の物語を新たに構成するに際して、仮名本『曾我物語』だけではなく、『吾妻鏡』が活用されたのだろうか。周知の如く『吾妻鏡』は慶長十年（一六〇五）に、徳川家康の命でいち早く活字化された。その後、寛永三年（一六二六）には、儒学者・菅聊卜が訓読を付した整版本が刊行され、さらに寛文八年（一六八八）には徳川家綱の命で平仮名本が出版されるに至る。江戸幕府の思想を支えるテキストの一つであったとみられる。[10] その重要性をふまえつつ、『富士牧狩』における『吾妻鏡』活用の様相を問うことが次の課題になってくる。以下では、Aの場面に着目して検討してみたい。

三、富士の巻狩の変容―『吾妻鏡』の活用から

『富士牧狩』は、曾我兄弟の敵討譚を右大将家、すなわち、頼朝と頼家の一門から語り起す。以下に、冒頭部の詞書を掲げておこう。

源二位右大将家、文を以は万機の政をたすけ、武を以は四夷の乱を治め、仁恵日々あまねく恩沢月々にうるをひ、君臣合

体し国家豊饒なり。建久四年の夏、信濃の国三原野より下野国奈須野藍沢の原の御狩りあり。それより富士野に越え給ふ。これ国の興廃、民の栄衰をも自鑒監のためぞと聞えし。御供には、江間の小四郎、（以下略）

線を付した「文を以は万機の政をたすけ―」の文言は、文武二道の理念を説く一節で、『平治物語』上巻の冒頭に同様の文言が確認できる。また、文武二道とともに「万機の政」に言及する例は、仮名本『曾我物語』巻一の冒頭にも認められる。続く、「君臣合体」による「国家豊饒」は、古活字版『保元物語』の序に類例が見え、易経の言として「君臣合体するときは、四海太平にして、凶賊おこる事なし」がひかれる。『富士牧狩』の冒頭も、これらの事例に同じく武家の物語の定型として、頼朝や頼家による文武両道の理念を説いていると判断される。そうした文脈を受けて頼朝による巻狩は、為政者の理念をあらわす営為として称揚されることになる。[11]

続いて、『富士牧狩』では、富士の巻狩に参集する「江間の小四郎」以下の名前があげられ、人名の列挙から『吾妻鏡』の活用が認められる。最も顕著に『吾妻鏡』への依拠があらわれているのは、頼家の狩猟のくだりである。

御家督の若君一万君〈後号頼家公〉十二歳はじめて鹿を射とどめ給ふ。愛甲の三郎季隆急ぎ馬より飛びおり勢子にかかせ御前に参ず。御感なのめならず。大名小名をのをの賀し奉らずといふことなし。御感のあまりその日の御狩りをとどめ、矢口の祭あり。江間よし時矢口の餅を献ぜらるる。〈此餅三色也。折敷一枚に九つ置。黒色の餅三、左の方、赤き色の餅三、中。白色右の方にすゆる。其の長さ八寸、広さ三寸。厚さ一寸也。折敷三枚にぞをすゆる〉をのをのかくの如きを笹原の上に行縢を敷、御二所の御座をかまふ。

頼家が十二歳で鹿を射ることに成功し、頼朝は喜んで矢口の祭を行う。矢口の祭とは、山の神に三色の餅を備え、饗宴をすることをいう。この後、頼家の功を喜ぶ頼朝と、それに反する態度をとる政子の対比、新田四郎の猪狩の成功と工藤景光の鹿狩の失敗という山の神にまつわる話題が続く。まず、右の場面を『吾妻鏡』の記事と比較しておこう。頼家の狩猟の叙述は、建久四年（一一九三）五月十六日条の記事に拠ると考えられる。

将軍家督若君始令レ射レ鹿給候。愛甲三郎季隆本自存物達二故実一之上。折節候二近々一殊勝追合間。忽有二此飲羽一云々。（中略）此後被レ止二今日御狩一訖。属レ晩。於二其所一被レ祭二山神矢口等一。江間殿令レ献レ餅給。此餅三色也。折敷一枚九置之。以二黒色餅三一置二左方一。以二赤色三一置レ中。以二白色三一居二右方一。其長八寸。広三寸。厚一寸也。以上三枚折敷如レ此被二調進一之。狩野介進二勢子餅一。将軍家并若公敷二御行縢於篠上一令レ座給。

（国史大系）

詳細に記述にされる三色餅の箇所も含め、『富士牧狩』がほぼ忠実に『吾妻鏡』を参照していることがわかる。矢口の祭が重要な神事であったことは、後に小笠原流の伝書にもみえ、[12]武家社会の故実として機能していたことがうかがわれる。『吾妻鏡』では、この後、三色の餅の儀礼がさらに詳述され、曾我祐信の失態を記す。『富士牧狩』はそうした部分は採らず、頼家の狩りの成功を祝福する場面のみを採用する。

『富士牧狩』では、右大将家の文武二道の理念を提示することから始まり、重要な神事である矢口の祭の儀礼にも言及する。この叙述は、『曾我物語』や舞曲の曾我物には見られず、この絵巻があくまで頼朝や頼家の統治下で、曾我兄弟の敵討を叙述する志向を持っていることを示唆する。とりわけ、頼家の狩りの成功を取り入れたことによって、『富士牧狩』は、曾我兄弟の敵討譚に新たに右大将家への予祝の一面を付与したと考えられる。

次に『富士牧狩』では、新田四郎忠常が猪を仕留める場面が続く。

　爰に幾年ふるともなき猪のしし、身にはふし草ひしと生、しし矢あまたをひ、勢子をやぶつて落行。新田四郎忠常をつかかり、ひやうと射る。あたると等しくとつてかへす。二の矢をつく間もあらざれば、弓を捨て太刀を抜く間もあらずつつと入り、人馬ともにかいすくつて二丈ばかり投げあげ、落はかけんと、牙を鳴らし、身をふるつて待かけたり。忠常手早き男にて、太刀を捨、中にて刀を抜き、をつさまにぞ乗りにける。（後略）

新田四郎による猪狩りが、富士の巻狩随一の要所であり、曽我兄弟の横死の伏線として機能することは、真名本『曾我物語』や仮名本『曾我物語』の記述からうかがわれる。[13] 右の箇所は仮名本の表現に拠ることは稲葉氏の指摘がある。[14]『吾妻鏡』には、このくだりはなく、新田の活躍を挿入したのは、『富士牧狩』の工夫であることがわかる。仮名本『曾我物語』巻八では大猪を「山の神」としており、『富士牧狩』は、矢口の祭と、景光の鹿狩の失敗の間に、新田の活躍を位置づけたことになる。後続の工藤景光の鹿狩の失敗の記述は、『吾妻鏡』五月二十七日条に確認できる。矢口の祭と、景光の鹿狩の失敗、いずれも山の神に関わる場面である。仮名本『曾我物語』巻八では大猪を「山の神」としており、これらの場面が一貫して構想されていることが知られる。

新田が大猪を乗りこなし、仕留める場面は、「月次風俗図屏風」以下、曾我兄弟を主題とする屏風絵においても繰り返し描かれてきた説話モチーフである。[15] 富士の巻狩を画題とする屏風が求められた背景には、『曾我物語』の享受だけではなく、語られ演じられた曾我兄弟の物語も想定されてよい。事実、幸若舞を愛好した松平家忠の日記『家忠日記』天正八年（一五八二）八月七日条には『信田』や『堀川夜討』にならんで「まきがり」なる曲の上演も認められる。[16] また、興味深いことに、舞曲『夜討曾我』の本文には新田四郎の活躍は記されないものの、舞の本『夜討曾我』（寛永頃刊）や絵入写本の『夜討曾我』の挿絵には、猪にまたがる新田の姿が描き込まれている。ここでは舞の本の挿絵を掲出しておく（図）。

『富士牧狩』が新田の活躍を組み入れ、それを挿絵にした背景には、『曾我物語』の本文引用に加えて、舞曲の挿絵をも含めた曾我兄弟の物語の新たな展開が確認できる。富士の巻狩といえば、新田による猪狩のイメージが浸透していたのである。絵画化の局面では、『曾我物語』と舞曲の曾我物とは、相互に影響を与え合って、[17] 新たな物語を生みだしていることがわかる。『富士牧狩』の成立もあわせ、こうした事象を単に書物制作の意図や傾向としてのみ捉えるのではなく、読者の認識や価値観をも含みこんだ近世前期の曾我兄弟の物語受容の諸相の一つとして理解する必要性を

強調しておきたい。

ところで、『吾妻鏡』の叙述と『曾我物語』を組み合わせる手法は、『富士牧狩』にのみみられるわけではない。近世を通じて影響力をもった『本朝通鑑』（寛文十年〈一六七〇〉刊）巻四十三や近世の軍記作者・馬場信意の著作『曽我物語評判』（正徳五年〈一七一五〉刊）にも見え[18]、近世の曾我兄弟の敵討譚の言説の一つとして機能していく。これらを諸言説を視野におさめると、『富士牧狩』は、『吾妻鏡』をも含みこんだ近世の曾我兄弟の物語のごく早い事例として定位できる。特に前者は、手法の共有だけではなく、勝田竹翁をめぐる文化環境とも関わる。最後に『本朝通鑑』の事例から『富士牧狩』の成立を探るための手がかりを探ってみたい。

図『夜討曽我』挿絵　画面左に猪に乗る新田の姿が描かれる
新日本古典文学大系『舞の本』（岩波書店）から転載

四、『本朝通鑑』の曾我兄弟関連記事をめぐって

勝田竹翁の活動は、徳川将軍との接点に関心が集まっている[19]。だが、その根幹には、林羅山・林鵞峰ら林家との文化交流があったとみられる。竹翁と林家との関わりは、『三芳天神縁起絵巻』の制作によって確認できる[20]。本作は慶安二年（一六四九）に松平信綱によって奉納されたが、その詞書を羅山、挿絵を竹翁が担当している。また、林鵞峰の日記『国史館日録』には、寛文五年十月朔日条を初見として林家とその門人に交じって、勝田竹翁とその子・貞寛の記事が散見する[21]。竹翁が屏風や肖像画、詩仙図などを林家の求めに応じて描いていたことがわかる。なかでも、興味深い記事が寛文七年（一六六七）正月二十三日条にある。

今日、春庵持春信画像来、是自去秋以春澤・春庵為价、令画工勝田陽渓図之、（史料纂集）

前年に没した息子・春信の肖像画を竹翁が描いたことが知られる。亡き息子の肖像を任せている点で鵞峰の竹翁への信頼を示す記事とみて大過ないだろう。

これら竹翁も属した林家の文化活動のなかに、曾我兄弟に関する事柄が確認できることは注目されてよい。『国史館日録』寛文七年十一月十六日条には、「十六日、早朝、見春常詠曾我昆弟古詩、懇加批語、句意共気絶」の記述がみられる。これは鵞峰の息子・春常（後に林鳳岡）が曾我兄弟に関する詩を作り、それを鵞峰が見たという。他にも林家で曾我兄弟を題材とする漢詩文は、狩野常信筆「諸葛孔明・曾我兄弟・楠公訣図」（仙台・伊達家旧

蔵。現在所在不明）の賛から認められる。[22]

さらに興味深いのは、林鵞峰の手になる江戸幕府の編纂物『続本朝通鑑』（寛文十年〈一六七〇〉刊）巻八十一に、曾我兄弟の敵討譚が歴史叙述の一環としておさめられている点である。『国史館日録』寛文八年（一六六八）正月二十八条には、草稿の補訂の記事として、「富士巻狩曾我兄弟始末詳記之」の文言が付され、およその完成時期が判明する。その冒頭は、矢口の祭の一節で始まり、次いで新田の活躍が語られる。

幸已頼朝大狩二富士野一。群士相争逐レ鹿頼家自射獲レ之。頼朝大悦供二矢口餅一祭山霊〈本朝射礼供二矢口餅一者以レ餅／為二黒赤白三色一一盤九餅一〉。（中略）

壬申大豪猪傷レ矢太獰。向二頼一。列卒無二近者一。頼朝命二新田忠一常逐レ之。忠常射レ之。未レ放矢。猪逼二忠常一。忠常乗レ猪。猪猶獰揮レ牙。懸二倒其馬一。而負二忠常一走。絶壁崖深谷無レ不レ到焉。忠常竹笠毛袴皆脱而被レ髪挙二其尾一而馳猪觸レ樹躑躅忠常抜二佩刀一刺レ之。猪将レ斃其蹄入レ土数寸、忠常遂獲レ之。

（『本朝通鑑』国書刊行会）

『富士牧狩』同様、『吾妻鏡』に基づく矢口の祭をめぐる話題の後に、新田が猪を仕留める様子を組み込んでいる点が注意される。『本朝通鑑』の記述では、続いて畠山重忠や和田義盛の助力や兄弟と母親の別れなど、『曾我物語』の話題を豊富に盛り込みながら五月二十八日の敵討と顛末を記す。直接の関係はともかく、竹翁の周辺には、『吾妻鏡』の叙述と『曾我物語』を基盤にして、新たな曾我兄弟に関する言説を発信できる文化環境があったのである。ここで詳述する余裕はないが、『富士牧狩』の成立や享受の諸相は、こうした文化環境を視野におさめながら、検討することが求められることになる。

本稿で言及できたのは、わずかな事例に過ぎない。だが、近世社会において、曾我兄弟の物語は、『曾我物語』を母体にしつつ、芸能や絵画、歴史叙述へと展開し、その枠組みを拡大していったと考えられる。物語メディアの展開や享受の場に応じて、その都度、新たな《曾我物語》が生み出され、読者に共有されていたことは間違いない。『富士牧狩』の成立と享受を追究することは、巨視的に近世前期の武家社会にとっての曽我兄弟の物語の意義を問うことにほかならない。自戒を込めていえば、語り物を含め、文芸の絵画化は、絵と言葉の対比を中心とした分析に終始する傾向がある。詞書の読解や挿絵の分析を基調にしながら、どう豊かに社会の文化活動として物語絵を理解できるかが今後の物語絵画研究の共通課題であろう。そうした視座に立つとき、万治三年に勝田竹翁が『富士牧狩』に携わった事実は、単に絵師と作品という枠組みを越えて、あらたな意味を持つように思われる。稿をあらためて『富士牧狩』の文化的射程を追究し、『曾我物語』から《曾我物語》への展開、その動態を明らかにしたい。

注

（1）稲葉二柄「勝田陽渓と曽我物語絵巻―翻刻・東京国立博物館蔵「富士牧狩」」（「大妻国文」二十一号、一九九〇年三月）。本稿では、基本的に『富士牧狩』の本文を稲葉論文に付された翻刻に拠り、適宜実践女子大学山岸文庫蔵本も参照した。

（2）勝田竹翁については、門脇むつみ「勝田竹翁筆「観馬図屏風」について―徳川家綱との関わりから」（河野元昭先生退官記念論文集編集委員会『美術史家、大いに笑う　河野元昭先生のための日本美術史論集』ブリュッケ、二〇〇六年）を参照。

（3）原本未見。内題「富士牧狩」。『ボストン美術館日本美術調査図録　第二次調査』（講談社二〇〇三年）に全図がモノクロ図で所収。本稿の執筆にあたっては同書ならびにボストン美術館のホームページ掲載の画像も参照した。

（4）絵巻二軸。外題「曽我物語絵巻　乾（坤）」。内題なし。水野忠央の蔵書を記した『新宮城書蔵目録』（国立国会図書館蔵）には、本伝本を示す「曽我物語」二巻が確認できる。同目録には、説話絵巻やお伽草子類も豊富に採録されており、今後の検討が期待される。安藤菊二・朝倉治彦「「新宮城書蔵目録」と「丹鶴叢書」と」（「典籍」三号、一九五二年七月）参照。本伝本に関しては、植松有希氏と共同調査を行い、その際の知見に基づく。

（5）絵巻三軸。三軸とも表紙に直接「富士牧狩絵巻」と墨書。上巻内題「富士牧狩上」。他は内題なし。『東京芸術大学芸術資料館目録　東洋画模本　Ⅳ』（第一法規出版、一九九八年）によると、昭和十五年四月に購入という。本絵巻に関しては、市川廣太氏と伊藤慎吾氏との共同調査の際の知見に基づく。

（6）伊藤慎吾氏の御教示によると、兵庫歴史博物館所蔵の『曽我物語絵巻』も竹翁筆絵巻系統の一巻であるという。後考を待ちたい。

（7）若杉準治「『古画類聚』所載図様の原本について」（東京国立博物館編『古画類聚調査研究報告書』毎日新聞社、一九九〇年）所収。

（8）松浦静山『甲子夜話』（平凡社東洋文庫）続編巻十六所収。なお、静山所持の竹翁筆「文會之図」は、松浦家の蔵書目録『新増書目　内篇』巻七（松浦史料博物館蔵）に記載があり、『甲子夜話』の記述を裏付けることができる。本資料に関しては、鈴木彰氏との共同調査の成果に拠る。

（9）注2前掲稲葉論文参照。

（10）八代国治『吾妻鏡の研究』吉川弘文館、一九一三年）、阿部隆一「解題―吾妻鏡刊本考―」（『振り仮名つき吾妻鏡』汲古書院、一九七六年）参照。

（11）王権や権力と狩猟行為の関連は、中澤克昭「狩る王の系譜」（人と動物の日本史2『歴史のなかの動物たち』吉川弘文館、二〇〇九年）を参照。

（12）『小笠原光清矢口開之事』（『増補訂正　編年大友史料併大分県古文書全集』一九六九年）所収は、永正五年の奥書をもつ。千葉徳爾『狩猟伝承研究』（風間書房、一九六九年）も参照。

（13）福田晃「曽我御霊発生の基層―狩の聖地の精神風土」（『曽我物語の成立』三弥井書店、二〇〇三年）参照。

（14）注2前掲稲葉論文参照。

（15）新田の猪退治の展開については、徳田和夫「室町期の民俗社会と曽我物語」（『曽我物語の作品宇宙』至文堂、二〇〇三年）を参照。

(16) 舞曲で「巻狩」と名付けられた伝本としては、宮内庁三の丸尚蔵館蔵『富士の巻狩』がある。この絵入写本は、舞曲『夜討曾我』の巻狩の場面を独立させたとおぼしい。この本の挿絵にも猪にまたがる新田の姿がみられる。『近世絵巻の興起―〈物語り〉絵の諸相』（三の丸尚蔵館、一九九七年）参照。

(17) 拙稿「和田酒盛譚考―『曾我物語』・舞の本・古浄瑠璃正本の挿絵をめぐって」（『国文学研究資料館紀要』三十九号、二〇一三年三月）では、舞曲の挿絵が『曾我物語』に影響を与えたことを指摘した。さらに事例の追究を重ねたい。

(18) 『曾我物語評判』については、浜田啓介「近世に於ける曾我物語の軍談について」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年）を参照。
村田明彦「馬場信意の通俗軍書―もう一つの『曽我物語』をめぐって」（『近世文芸』六十二号、一九九五年）には、同書以降の曾我兄弟の敵討譚が必ずしも『吾妻鏡』に遡るわけではないことが説かれる。今後検討を重ねたい。

(19) 近藤喜博「勝田竹翁筆　河越三芳天神縁起」（『国華』六八九号、一九四九年）。

(20) 注2前掲、門脇論文参照。

(21) 勝田竹翁の事績は未だ不明な点が多い。『国史館日録』での記事を掲出しておく。寛文五年十一月朔日条、同十三日条、同二十九日条、同年十二月二日条、同五日条、寛文六年二月晦日条、寛文九年九月二十九日条。今後も捜索につとめたい。

(22) 本作については、市川廣太氏の教示を得た。松島仁「徳川将軍権力の権威化と〈歴史画〉の誕生―いわゆる《楠公図》を中心に」（『徳川将軍権力と狩野派絵画』ブリュッケ、二〇一一年）参照。

〔付記〕
本稿は、国文学研究資料館の共同研究「語り物の絵画化と享受環境に関する基礎的研究―〈曾我物語〉を題材とする絵入本・絵巻・屏風の考察を中心にして」の成果の一部である。松浦史料博物館、東京芸術大学美術館、宮内庁書陵部には、資料調査・閲覧に際して種々ご配慮頂いた。担当学芸員各位に篤く御礼申し上げる。

（みやこしなおと　本学兼任講師）